

小泉龍人 著『都市の起源—古代の先進地域＝西アジアを掘る』

講談社、2016年3月、254頁

常木 晃

Book Review: *The Origin of Cities: Excavating the Earliest Civilization in West Asia.*

By Tatsundo Koizumi, Kōdansha, 2016

Akira TSUNEKI

本学会員である小泉龍人氏によって著された本書は、考古学資料を用いて西アジアでの都市形成を論じた、読み応えのある一般啓蒙書と評価できます。

本書は、都市形成への胎動期としての「都市的集落」が始まったウバイド期に始まり、筆者の言う「最古の都市」が出現したウルク後期、そしてその都市が発達していく初期王朝期までのメソポタミアを、考古学資料に基づきながら丹念に文化史的記述を進めていくというスタイルをとっています。その記述は詳細かつ堅実で、西アジア考古学の初学者にとっては、多くの整理された情報が詰まっています。本書は序章から終章までの7章から構成されていて、水利や階層化、都市計画、交易、宗教など、メソポタミアの都市形成をめぐる重要なトピックを様々な視点から論じるとともに、各章でこれまで筆者が述べてこられた自説が随所に披露されます。

序章「二つの「世界最古」の都市」では、ゴードン・チャイルド (V. G. Childe) に始まる都市をめぐる学史的整理、新石器時代のエリコ (Jericho) は都市かどうかという議論、南メソポタミアの灌漑農耕地帯で世界最古の都市 (ウルク) が誕生したとする主張など、まさに都市研究の王道と言える議論が展開されていますが、冒頭で「私の考える都市とは快適な暮らしを追求した試行錯誤の結果である」という強烈的な自説がいきなり述べられていることに、読者は相当に面食らうかもしれません。また、ウルク (Uruk) とハブーバ・カビーラ (Habuba Kabira) 南が最古の都市であるという筆者の前提には少し距離を置く研究者も多いかと思われます。

第一章「川、墓、神殿」では、南メソポタミアの灌漑地帯で世界最古の都市が誕生したという前提に立ち、水利と船の輸送、墓から見た家族構成、神殿の発達などが議論されています。都市胎動期であるウバイド期が平和な社会であったこと、それを筆者が「祭祀統合社会」と分類していることなど、これまで筆者が研究され主張されてきたことが分かりやすく概説されます。本章の中で評者がもっとも

違和感を覚えたのは、「複数の核家族から成る拡大家族」という使い方です。社会学や文化人類学では、「拡大家族」とは直系家族や複合家族のことを指し、核家族 (夫婦家族) と対置的な概念です。ですから筆者による「複数の核家族から成る拡大家族が1世帯を構成していた」という記述には混乱させられました。考古学でも、核家族と拡大家族は対置的に使い分けるべき概念ですので、「複数の核家族で1世帯を構成していた」ないしは「拡大家族で1世帯を構成していた」と書き換える必要があります。

第二章「「よそ者」との共存」で、筆者による西アジアでの都市誕生までのプロセスが次のように説明されます。気候最温暖期 (筆者は気候最適と呼ぶ) の6000年前ごろ、海水面の上昇によりメソポタミア沖積低地で生活していた人々が移住せざるを得なくなり、「よそ者」として余剰食糧に溢れた集落へ惹きつけられていきました。その新天地で工人として働くことで、産業の専門化が進み、人間関係に変化を生じさせて階層化が始まります。「よそ者」を抱えた各職能集団が共存していく上で、多様な価値観の衝突を和らげるための新たな仕組みが求められ、その流れの中で都市が誕生した、とされます。これは、南メソポタミアで紀元前4千年紀後半に都市が登場したとする従来の定説を踏まえ、それに筆者なりの脚色を加えた説明と言えるでしょう。「よそ者 (outsider)」などいくつかの議論すべき点がありますが、全体としてそれほど突飛でもなく、また斬新な説でもありません。そうした意味で、ごく妥当な説明ということもできるでしょう。ただ気になるのは、筆者がごく妥当な説明をしているにもかかわらず、先に述べた序章冒頭でも、また各章の随所にも、また終章にも頻出する、「都市とは快適な空間であり、快適さを求めて都市が誕生した」、という意味不明のフレーズです。本章で述べられている筆者による都市誕生までのプロセス、特に多様な価値観の衝突を和らげるための新たな仕組みとして都市が誕生したと言う説明とは全く相いれないフレーズだと感じるのは評者だけでしょうか。

第三章「安心と快適さの追求」では、前章で述べられたメソポタミアの初期の都市の実際について説明が加えられ、評者が最も興味深く読んだ章です。具体的にさまざまな事例が筆者の視点から紹介されます。例えばメソポタミアで初期の都市を議論する際に必須の「城壁」について述べられていますが、日干しレンガでつくられた城壁が、ウルク前期のブラク (Brak) では幅2 m、ウルク後期のハブーバ・カビーラ南では幅3 m、初期王朝期のアブ・サラビーク (Abu Salabikh) では幅4 m以上と時代を追うにつれて堅牢となっていく様相や、都市計画の発達や上下水道が整備されていく様子など、大変わかりやすく記述されています。筆者の述べられる安全の追求というのはまさに初期の都市成立の最も重要な要素だと考えられます。また都市計画や上下水道の整備は、都市と言う人工的な空間にたくさんの人々を居住させるための苦肉の策だと思われるのですが、それを快適さの追求とされる筆者の視点はたいへんユニークなものと思われる。

第四章「人と人をつなぐ」では、祭祀の広がりや物流などの交易について議論されます。北メソポタミアの「目」の祭祀とその系譜および南メソポタミアの「ヘビ」のシンボルを対比的に論じ、前者をイシュタル、後者をマルドゥークの属性と結び付ける点など、筆者の豊かな独創性を感じますが、議論あるところでしょう。トークンからタブレットまでの文字記録システムの発達を、都市国家の出現と結びつけて上手に説明されています。

第五章「神を頂点とした秩序」では、都市の権力者が祭祀的な支配者から世俗的な支配者へと移り変わる時代の、都市化における筆者の言う「陰」の部分論じています。神殿経済の発達から宮殿の出現までの歴史の変遷や、支配者の財産管理などの問題が整理されます。アッカド王朝時代のリング・インゴットを最古の貨幣とみなす点など、様々な新知見が盛り込まれています。都市の巨大化と戦争のはじまり、国家の形成などが議論されますが、例えば冶金術を筆者は便利で快適な道具作りから都市化によって兵器開発に転換すると考えているようですが、果たしてそうでしょうか。ウバイド期を平和社会と考える筆者は、相当な性善説に立っておられるのかも知れません。

終章「都市と権力」は、本書のまとめです。本書の表題は『都市の起源』で、「はじめに」に記された本書の狙いは、「なぜ西アジアで最古の都市が誕生したのかというテーマを考古学的に解き明かしていくことにある」とされています。第二章で都市誕生までのプロセスは説明されるのですが、ではなぜ西アジアで都市が誕生したかについての明確な答えは本書には見当たりません。答えらしきものを探すとこの終章の中に述べられている「シュメール地方では、厳しい乾燥気候のもとでの暮らしを快適にするため

に、どうしても都市的な空間の構築が必要であった」「対立や競争を本質とする西アジアゆえに、主義主張の異なる集団が互いに自滅せずに生き残る知恵として陽と陰の調和が保たれた都市が創り出された」という部分でしょうか。筆者の主張は、紀元前4千年紀後半の南メソポタミアの厳しい自然環境とそこでの人間集団の対立が都市を生み出したとまとめることができるでしょうか。

ここで本書全体への評価についてまとめておきましょう。西アジアにおける都市形成論は、筆者が述べておられるようにチャイルドの都市革命論を嚆矢とし、90年代初めのギエルモ・アルガゼ (G. Algaze) によるウルクワールドシステム論で頂点を迎えます。紀元前4千年紀末に南メソポタミアに出現した周壁で囲まれ巨大な神殿域を有した超大型集落とそれに続く初期王朝時代都市国家の繁栄という物的証拠を基に、銅石器時代ウルク後期の南メソポタミアに都市が出現したという、現在まで主流の都市形成論です。その説明には、南メソポタミアの高温の低湿地という自然環境、主要資源を全て外世界より搬入せざるを得ないための交易システムの発達などの背景が指摘されています。

しかしながら1993年のアルガゼによる *The Uruk World System* の出版前後から後に、特に北メソポタミアを意識したもっと多様な都市形成論が多くの研究者たちから提出されています。例えばその嚆矢と言える1986年に発表されたハーベイ・ワイス (H. Weiss) の *The Origins of Cities in Dry-Farming Syria and Mesopotamia in the Third Millennium B.C.* では、面的に広大に広がる北メソポタミアの天水農耕地帯の潜在力こそが都市形成の原動力であったことが主張されます。同じ北メソポタミアを扱った2003年出版のトニー・ウイルクソン (T. J. Wilkinson) の *Archaeological Landscapes of the Near East* では、天水農耕地帯周縁の「不確実性ゾーン (Zone of uncertainty)」こそが都市国家形成を準備したことが説かれています。両者が扱ったのは主に紀元前3千年紀の北メソポタミアでしたが、同様の状況は紀元前4千年紀やそれ以前の北メソポタミアにも当てはめることができます。特に2007年のジョアン・オーツ (J. Oates) らによるテル・ブラクを最古の都市としたモデルの主張 (Oates et al. 2007) や、同年発表のジェイソン・ウル (J. Ur) らによる同じテル・ブラクの詳細表面調査による都市形成モデルの論考 (Ur et al. 2007) は、北メソポタミアで紀元前5千年紀末のLC II期に「都市」が出現していたことを強く示唆するものです。これらの論考や、テル・ハモウカル (Tell Hamoukar) での都市的様相に触れたクレメンス・レイチェル (C. Reichel) の論考 (Reichel 2002) は、単に都市を規定するだけでなく、巨大な集落誕生までのメカニズムに迫ろうとした近年の重要

な議論ということができるといえるでしょう。それは、紀元前4千年紀末の南メソポタミアで都市が出現したというこれまでの定説に大きな変更を迫る重要な主張なのです。従いまして、西アジアでの都市の形成を学術的に取り扱うならば、当然これら近年の動向の議論が必要ですが、残念ながら本書にはこうした議論は紹介されません。テル・ブラクは「余剰食糧を豊富に蓄えた魅力的な集落」を示す「都市的集落」という不可解な項目に分類され、その本質は議論されないのです。これでは学術書としては非常に片手落ちの印象を受けてしまいます。

本書の重要なキーワードである「よそ者」についても議論しておく必要があるでしょう。前述したように、気候最温暖期の海面上昇により海岸線が内陸に移動し、南メソポタミアの沖積低地が塩害などによって暮らしにくくなって人々が移住せざるを得なくなり、約6000年前に「よそ者」が発生して余剰食糧に溢れた集落に惹きつけられていったと、筆者は主張しています。ここで筆者が言う「よそ者」が惹きつけられた集落の例として挙げられているのは、北シリアのカシュカシヨク (Kashkashok) やコサク・シャマリ (Kosak Shamali)、ハブーバ・カピエラ、北メソポタミアのガウラ (Gawra) などですので、南メソポタミア沖積低地から主に北メソポタミア方面に「よそ者」は排出されたと思われます。もしそうだとするならば、そして筆者が主張するように「よそ者」が新天地で工人として働くことで、産業の専門化が進み、人間関係に変化を生じさせて階層化が始まり、「よそ者」を抱えた各職能集団が共存していく上で、多様な価値観の衝突を防ぐ過程で都市が誕生したとするならば、当然ながら都市が誕生したのは「よそ者」を輩出した南メソポタミア沖積低地ではなく、「よそ者」を受け入れた北メソポタミアでなくてはならないと思われます。それにもかかわらず、筆者は南メソポタミアの沖積低地に立地する代表的な遺跡であるウルク遺跡で都市が誕生したと主張するのです。それは大きな論理的矛盾ではないでしょうか。評者は「よそ者」云々の議論には与しません、この話を追いかけると評者の頭

は混乱させられ、なかなか整理をつけることができません。

本書全体は西アジアの都市形成期の考古学的な情報がよく整理されていて、この時期のメソポタミアを知るための一般啓蒙書として大変有用なのですが、快適さが都市の本質という意味不明のフレーズがコンテキストもなく頻出することによって、都市がなぜ形成されたのかを巡る本書の主張が混乱に陥ってしまっていることは誠に残念です。

最後になりますが、この書評では、評者が違和感を覚えた「都市とは快適な空間」、「よそ者」、「核家族と拡大家族」などいくつかの用語にこだわり過ぎてしまい、筆が滑っているところがあったならば、筆者にお許しを請いたいと思います。西アジアの都市形成に関心を寄せてきた研究者仲間のたわごととご看過いただければ幸いです。

本書が成る背景には、長年にわたって実際にウバイド期やウルク期の遺跡の発掘現場で都市形成に関わる遺構や遺物の調査に当たってこられ、それらをつぶさに観察されて論を組み立ててこられた小泉龍人さんの日頃のご努力という背景があります。そのご努力に深く敬意を表するとともに、都市とは何かという問題に関心をもちの少しでも多くの西アジア考古学会員の方々に本書をご一読願いたく、衷心より推薦させていただきます。

参考文献

- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System*. Chicago, The University of Chicago Press.
- Oates, J., A. McMahon, P. Karsgaard, S. Al Quntar and J. Ur 2000 Early Mesopotamian Urbanism: A New View from the North. *Antiquity* 81: 585-600.
- Reichel, C. 2002 Administrative Complexity in Syria during the 4th Millennium B.C.: The Seals and Sealings from Tell Hamoukar. *Akkadica* 123: 35-56.
- Ur, J., P. Karsgaard and J. Oates 2007 Early Urban Development in the Near East. *Science* 317: 1188.
- Weiss, H. (ed.) 1986 *The Origins of Cities in Dry-Farming Syria and Mesopotamia in the Third Millennium B.C.* Guilford, Four Quarters Publishing Co.
- Wilkinson, T. J. 2003 *Archaeological Landscapes of the Near East*. Tucson, The University of Arizona Press.

常木 晃

筑波大学大学院人文社会科学研究所

Akira TSUNEKI

Graduate School of Humanities and Social Sciences,

University of Tsukuba